曉臺句集

上

ヨ 13
文和 856
號 1

附央四垂ヨ三條集と云ふものをとりて
まゝ雪中 半化粧面三吟の句集なり
半雪二吟の句 春景を主に春面
吟の句を主事主つゝ六百餘句その
馬の爲ヨ作中句れるヨ嘶ヨの百七十
餘句いろ〳〵てゝ深を面半亀表 中回
芭蕉面巷句集を本ヨえゝ央おの清ゝ

越中國小杉町
聽雨庵藻谷蕉五

を記をものせし　央曰　さるを　師　垂示
在きし　時　おもを　様　とき　事　を　曰　師
いう　おほせ　を　ものし　許し　給　て　又　曰
事　あ　て　そ　ものを　なす　はく　われ
の　ものし　央　ものを　て　者　面　を　白
案　を　様　を

士朗

今　は　むし　先師　れ　に　一　冊　あ　は　れ
な　自　緒　を　し　成　つ　人　ま　に　し
お　の　紙　ほ　き　案　は　ま　な
事　を　み　あ　ら　な　る　ま　を　れ
完　し　を　師　遷　化　の　な　く　三　集
何　し　を　な　の　を　出　し　ま　れ
間　誤　紙　る　事　三　の　中　言
央　を　を　を　正　し　め　と　の
二　を　を　仏　古　く　冊　に　出　る　は　ほ　ま　は　再

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化六年
己巳 仲秋日

[illegible]

曉臺先生發句集上

春之部

歳旦

ふる袖を[illegible]ぬぎ[illegible]日乃始

太箸や後ト[illegible]云へし　椿木山

[illegible]餅　[illegible]生して牡丹　文[illegible]

[illegible]の妻　[illegible]もいとまと　朱くくわ

人中の龍　[illegible]出[illegible]　四方[illegible]

[illegible]人[illegible]

元日や　[illegible]人あり[illegible]

元旦[illegible]つかあ[illegible]て士[illegible]初日をあ[illegible]

急雨と俳諧うけ

武陵迎春

かゝの名ゆゑ再可ゝ樓上に新の春
門と小松立て注連をわられ
ものあり

越の旅　ゆきなりに辻さびし

狂曙の名ひろてゝと酒て大陽を招ゝ樓を
渦田川の西岸より遊と掛て下絵の小松張を見せけ
十字御所より市聲をさゝしを清て閑なり

春と人と涼山ゝ　初日新

よろひの雲見てゝあて花のゝる
いゝいゝ　あゝゝの表れ
年比元三の旦あ小蕉翁の筆法を一帯く心をゝみ
続ゝゝひと俳〻菴の壽を偶たゝ事ハつゝれ
ゝれくゝの一軸ハ宗祇法師ゝ家の一字よりも
ゝれくゝ法を科小宛めれゝ一切を
謹書して改る心の玉ゝもなゝなり

此心　春　蓬　莱の　ゝ孔　椎子

寓樂府臺ゝ帰ゝと年比壽をゝて多る思ふ
紀氏ゝ客中小あと

おしあゆをなくてもあるん　千代尼

雲の宮百　ほのぼのとゆるるふの妻

蟄虫うこめき元春陽と伺ひ家人淡く侍賞を建く

むしぬきもけぬ　秋風

元日のまれ日免つ〳〵ふ〳〵人をそ〳〵東海に

出るものにかはとうて

根つくせくるをや　その子孫日家

若菜

若菜ふ　一ふしあれや　頼ゝ朝

京綾の沈中て　出る　義ゝ

わるけむ人を考る　香　静

若菜けむ人　高合如　我や川

わるふの日屋ゝ　雨と歩ゝ梨

きりとれ　鯉も切へき日なりけり

ひつを入系してゆけ　若菜　播

雨中人日

裾（ツヽトリ）や　傘をけを

雲ゝけかなひてゝ　ゝ菜つゝ

わるふの日三輪の酒ゝ　出初ゝ　播

徳みのや　已の磯田乃　若菜ゝ

おれ宵朝を引きハ事ゝ　ゝさゆく民の菁

折ふしにあやかるも是もまた
一入ゆゝしきおほしめしなれ乃
皇朝にて有うさげ也

玉簾にきうめかむ 蕣新と
年のうちに春ゝめらるを
そゝの春きのふと 色し初るか
うゑ 梅二三日の 蕾ゝ那
ゝとかしき
梅咲く十日に成ぬ月和ゝか
火ゝ毋ぎはゝ梅ゝに見ゆるなり
蕗のうめゝ 板戸哉

清文席ゝこゝおりてや 梅のな
うるゝりて 拾る蔓あり宗矢の邸
其間の名ゝ 梅も あゝ毋 をゝ梅
淵のう矢 ふ行つゝに成ふ名ゝ
梅折て 信濃ゝ 雪深し
実ゝ ゝく ぬゝれき 杖や梅ゝ
うめゝらや 年豊ゝ 梅ゝ 行
家宿のう矢 矢いつゝく 梅の花
市ゝ見ゝく
梅林を出く 燒ふ 梅のつ屋ゝふ

梅林すきまもほころや落梅空

正月十一日契田諸兵衛

梅うゑに鶯鳥来し　筍掘子

うめうゑや つぼみとなるとうゑ梅

聖廟法樂四句

信仰き深き法華のうめ

うめさくら　蔵志を諸恩もやし

まゆ山吉野さくら　咲ふ　竟

花ゆゑ　まこと筆のもやしの郎

八十賀　梅柳　八十うめも　寿　世

大雲寺漢うめ　なぶ　三月さうつき初吉乃日

歌画梅　水潮歌　節れう見乃した枝れ

花を　ゆくゆ　古根より

柳　ほつつと　黄　柳の芽

二日見ぬ　枝や　柳　おれ　うそ

や　去　しかりをふくむやなきれ

乃ら　くと　柳見ふり　つみ

さかの柄　ほをけて　柳

吹ちく　牛乃中より糸　なぶ

籬菊　柳

又江をきのふ　をとつゐ　柳北芽
さし初　さるかき　うの花かの郎
青柳ふる山路のあるあり　義忠
人去て堅井戸　柳　風そよ
ゆ蛍ゆあつてけふ　色なし　れ
籠火のとまりあり金魚　柳武

武州八王寺星布

暁のほしを溶ましやかきれ
隆達ゆ破蓋ましめをのつゆ色ゆ
れはあるものやあるに張蓋をハゆる張ゆつま
ゆの涉ましやゆ暁又の日ハ涉ふちきりをゆハて
色をよくゆの秋ゆ偽ゆ郎の郎のゆましま
ましても世の中
こハ小宮義人ゆ己園して自此ましゆ云をを
扇ましのをましゆ張ましをハしを
ましのましゆ人ゆましゆ　柳ゆ

義入新星祭

義いりと柳ゆ北ゆましを見和ゆり
ゆ市入ゆ本廏涉ゆく　人ましゆ
春雪　ましゆゆゆ扇てましゆ衣紋ゆ郎

去の雪 衣鴈の行ヲ修岩し
ゐれ尾をむすひ捨る 雪月
雪解て沖中河を 行方なれ
ゆきとけや 深山景を 帰鳥
身累る鍋山の雪解 かくうれ
古草や もゆきりしくハ 雪の露

雪解

春日

日の春れ ちまたは 風の光里哉
もれ乃日や 梅の下りの陰之気
袖とけの 下川の中川 春日哉

春草之粟

秋ハ営事むとする徒然とくるかよし 遅るれハきれんを
為してかしまハ文称多く夏ハうち渡る人のたゝゑや
つまやと見うた足る你かしにきくも聞くもきようた
然しきうめきたるそ涼しさ文おもしきそ事は
かりめあかま柳のすゝしく窓の志うくとみほひ秋河
見やるうハその目うれ夢去りて風のさやうれ松かて
そこひなハ春のと山ハそうくにひさるまでもはしみるを
春のみなそいとふうされ徐のまかりんろとぬるま
猶なをこりあるかきなし

春をまつ心 とほし 遅るれ 春の雪

[illegible]

古琴や[illegible]

[illegible]

春夜　春の和[illegible]　梅柳

[illegible]　吟て　天龍寺

[illegible]

春の和や[illegible]　三輪の杉

[illegible]

伊勢神宮奉[illegible]人をたうて

春恋　閨ふ[illegible]く牡丹ないと　春の[illegible]

[illegible]

春月　仲の業[illegible]　二日月

[illegible]　[illegible]

うめよ月[illegible]　[illegible]

梅　[illegible]月　[illegible]人　[illegible]

松　[illegible]て[illegible]　[illegible]の春[illegible]月

[illegible]き方ハ[illegible]の月

[illegible]　うしとて　こえもう　二日月
おぼろ月夜のうき朝　　ふるさとや
[illegible]月　宇治の山を　[illegible]
[illegible]　ゆき　一ちれば　[illegible]
大[illegible]　[illegible]　[illegible]の月

仲小路くるまの画像

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]

うしとて　[illegible]　日も入ぬ
[illegible]や　仲の[illegible]　[illegible]
うしとて　[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]と　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]ちし　[illegible]　[illegible]
うしとて　[illegible]　[illegible]
[illegible]や　人[illegible]　[illegible]
うしとて　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]

うゑしまの きくを初音はうゑば
宇之花芳きをみれば小実成て
うゑしまや月をほちつゝ風のこえ
きくの 咽ふるめり 山口の郷

霞

八重霞 ていまく 新なる次
来てうれたれを見て口ずさむ

湖上吟

霞漕て三のあるかる うれ屋ぶ
山うれく 霞下きて 大堰川
水の面てのすむ口の形みしまう
浦うれ夫なるうれ夫野り出

春風

うれ夫こめく 霞むり きれの白ひぬ
きゝ風の 新をあゝまよみれ
里のるれ 春楽ゝく 春の風
まれや 沙田のかぶ あさみう
きゝうれ 吹をて 霞を初鶏の郷
うゑや 岩れ きれくも 野上
新の尾て 見るまてきれう 野
きゝ野ふ たきゝ 夫女のいう郷
ゆる野や 花の風て 春の風
きの羽をう れをりふまきれう

玄文三十三回

鳥雀屋とめられて嚶〻と鳴葛蕨根を拔て赤葉
もを考へ平あり秋まで夢無村なく秋今を八幡宮の
ある時和尚志を山のあと樣て台嶺の禁金和精舎よは
巷をまうことときあえしは手に交游玄手れ情う
場人まれるものいさを山をうう耳なれを起しを

口をあてて語る知らるれ長崎を言をなれ又うくをおき畢の
ちう〻法を一味のうりしよりまは梵琴畢あうれて
清寥あり人侍あまうく烟霞を拔く見皆れ人の新なれを
問西うう系を率う貌に対うと秋是八幻しき新を調育の
新〻むとまれをうれ　あ吉なう

隅田川漁火

白魚　きううとの骨形を漁すかまう郎
〻〻魚やうき世の雪コ目を動き
新〻や干結うける　廉の角
伝楽の業ううまけし手結う郎

春雜

春の海色何不尋人一里

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]日[illegible]

卯月[illegible]新[illegible]なし[illegible]　人

日[illegible]三井[illegible]下れ[illegible]と

春の[illegible]ちの[illegible]三井のあ[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]山　[illegible]

[illegible]女[illegible]を　袋果

人[illegible]　重[illegible]女　[illegible]

七[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]

花の[illegible]の[illegible]を[illegible]　人心

[illegible]や[illegible]下り[illegible]　吉羽山

桂[illegible]子七十賀

[illegible]代[illegible]

[illegible]中　切て[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]中

出代　出[illegible]や[illegible]　[illegible]切

[illegible]　[illegible]の[illegible]　春乃雨

春雨や枯木の上[illegible]

旅人の[illegible]や[illegible]

きるれ面　行樹打をなるあ　うり
春面や　猿子城ひろく　富士の霞
ほけ見ハ　聖の　茶山をきれ　雨
雪あり　藤更いとう　春乃面

木の芽　俳ホれ　芽を法華れくうれ　ふ
春れ芽　ヨ乃の古屋なりうしや
ふるの中に　おれをそ　ふ
わっきや　くうれ車れ　歌きう
春姉の　ヨよ　ほうれ　日数う郎
龍門　俳人て　芽をきけこむ　姉の

蛭紀く　芽姉　たちぬを　白れ
芽れぬく　小婚う　老いや　疲し
表あし　や　老　慢も　芽も　原

蕨

屋ふるに　蕨をて　を打をる
わっひ　物ヨ　ふを　ふを　菴を　四紙

董

長山や　人位あを　をすれくさ
董つめは　ちひ　れ　れ　ふ郎

二月寒食といつるを皆新して

打ちれ　沼手　変を　れすみを
姉の菜れ　れ　かれ不　董郎

紅葉く雅なれども　すべて其の時
人は親のやけ堂の雑るうちにて
雑子　親のあるうち又時なきこの郎
作者無や　花と咲て　雑子の山椒
弱むらしくさてうかや雑子の形
三位乃　川水色　きしの鶯
きゝ　時やうしろ法花　花塩菓
衆をあめて　実座ふさむ　雑子乃考
黄石乃　雑子　ほとゝ　あらいなり

名ものの紙
道徳つよき時名四隅を濃き人雑和和とよく人を
益者ふく動く風歌の位を忘れとなる
雲紙くし　日なく　れぬ雑子の形
雲宵　雨雲や　とくさうさ　て　時雨なり
牡丹の　岩れ　ひより　あけひなを
舞　花なり　山家の　姿なるこなり
園の月一宮あり　平て　杜舞くいよ四隅と　ゆめ　ろ
事叶なひき　会く　水あ　ありよ　又事よ　海　業　ちろと

峠寺一名は田古呼く女もの たゝ夢ゝ古唄うゝ乙出光
ゝゝゞあゝゝとれまふ一ゝられ 三雅時々なめ倉廩
たれたゝもけ市春百歩を語られるかゝ訪ゝて
おゝうゝ呼ゝはあゝめゝと つまゝ知られく唯糸おすふ行や
那ゝゝ名のき八ゝ年ゝ月ゝ れあり心ゝ親ゝゝあゝゝ ゝ名ゝ
いゝ行ゝゝゝれあゝたゝまゝ 稚色又情を始ゝ松春ゝゝ一松春
一遍ゝて 牧境ゝ一の

陽炎の 物みれ 乳の おゝうゝ郎
ゝけふふ 寒れ ゝ月の月 ゝ
加ゝゝふの中 ゝくゝゝむ ゝゝれ

項京や ゝ春多琴の 乗しき立
ゝけふふの 蜉蝣を育る時百乳
項岩や ゝまゝゝ 酉のむし れ息
ゝけ呂寺や 卵の出れ 巣を出れ

聖宇ゝ墓ゝ丸て

かゝゝゝゝゝを ゝふも猫を ゝ ゝの乳

猫高 高 狩ゝれ ゝ ゝ日ゝゝゝ也

ゝひ猫や わゝ古寺ゝ ゝ 列生

胡蝶 蝶ゝん て 風なゝ ゝゝ みゝゝゝき

猫ゝれゝ 乳猫あゝ ゝ 乳の蝶

とのゝ大木おそれ螺鈿蒔絵の如
帰る人　蛾夫の矢先に結び蛾
花き果しとおもふ西東の人形
書きし　吉良の日向（オキテ）帰る
西山や　ロみの上をり人北まち
わゝ色しく　きり山紅て帰る
おの色咲蕾い人の国を毋ゝ海見気ぬ
よきゝゝもれゝて
峰ゝ高北　毋ありとき西蕾て
陰西ゝ　あゝり　乃のゝ　ゝこの毋

西来北原　おきゝれ　ゝく　帰る
紅梅　紅梅や　思ひ庫ロ乃　中一日
ゝれゝゝて　ゝて　紅梅と　ゝ
紅梅や　梅頃　ゝく　お不ム
椿　赤椿　咲ゝ　出下人　蕾ゝ
梨子　海ゝは　ゝつゝ　紅ゝ　の花
海棠　海棠や　強ゝ　墨ゝ　橘花
西ゝ　ゝゝ　ゝや　北西北　ゝ女と　央ゝ　ゝ　ゝ
おゝの白　ゝと　ゝて　ゝ

秋ゝ　ゝと　ゝ人　流　北　田螺ゝ

水口にころりと寒の田の邪
田の畦を田に成たむほど赤ひ出
蛙生ずるなるべく なく 蛙
簪ずるうらの 小流かくれ
果てしやそれ 流れも多く 蛙
鳴くそれの河骨 咲るうれ水

菜花

菜のそれや 人まく 蕨 ろう
なの花や 法 見えり 菜の人
菜のそれ 目高の 柳 風そし
輙く 面に 菜のそれ 赤うる なう

山吹の 小 赤 赤の花乃 街 の邪
菜の花や 市 なれり 鎌倉 城
なのそれや うら見 れ 邪郭 里
菜に花の そ 内 る みゆる 頃 れ
なのそれや し れ そ の 相ほ け
咲 書 ふ て 菜に そ れ 如 邪 廊
なのそれ て 赤のひ 女の 戸 出 水
菜の花の 脊 戸を 海 て 面 者 の 邪
かれそふや 南 ち く 日 ち ゆ 者
菜の花や 呉 も 九 里 の 赤 の 者 う

高の石や　豆打く　四うの法師

山ちうなのれいちゑ　稼げ

寒くや　里の山畑うちれ不申

畑うちや　ひる寝　乃まれの後

仏央うの住吉寺にて

ゑ毋移や　寒く菜畑　新　乙鳥

蕗の面　香ぬ　て　活う　氣

柳ゑ蕗の画像

春の碑　さまゝゑ寒さうつく夫

一のひ海れや　蛙きうれ　磬氣

野山寺　茅けゑ八重山吹の俳句ゑ那

白雛の　山ふき　ちれ　逢ゑ

蕗とれ　ゑや　まふき　俤きうこゑ

おほうる　ゑて　西吹ちて　起ゑ氣

三月　烏城の　夢ゑうう　ゑ京の　黄白ゑ

雛　雛の　ゑる　とれて　ゑまほけ氣

ゑちの　間れ　ゑや　桃うさうう

不夜機うく

雛のくさけ　雛の　ゑ神と　拍なれ

碑　さゑや　ゑのうゑみゆる　氣なの氣

無明をとはんと雖の一座小
加賀の下はすをひて
雑の有はは平うりさは河原屋
ある人の世をの高ねをくおもてはへ今
白をとをきて
世をうり秀句北条寺色あり
雑合　とり合を目もみきめく表や
桃　実ちをくいりて　もの花
四五人の桃花れ花ぬ高北中
神坂ふ　みる里なり　今

市ノ又ふく
桃　ちくく　表ちる雲水也
梅さくら多く名の色おめりを興あり姫路をくれ
世を杉なをする往来やたく名ほきをれて人のため
又苦しき表ひ花
桃の花　ちり　古人を　名京　表
塚尾氏金六十貫
うハさは　桃　王母の桃　王母
桃の石　打　高　高　深　山里
角ちる　寿色　ちれく　表北京

武蔵の国 花面くや 枇杷の花
初さくや 花の色の 薄黒き
蓮花をたちされと 四方八方 雲り
土佐の西の 新く扇や 蓮花幕

雨日花を山の 拾帝

井くるま 音きを 思ひ たのしあれ
鴨の下流水 樽の 拾ひて サ日の月 夜の浮く 頂にて
をそく 所の 雨をみて

春の 家 蓮花 東下 見つ 拾 北
海東 東 候下 拾帝

蓮花 さう 所 見下 拾 重 あ色
東山の 茶 見 ま ま や す 蓮花 東 経 雨 の 雲 と 像
西 蓮花 ま あ ふ の 引 つ き 蓮 も 人 も 本 う 蓮 ぬ

花人を うけ 蓮 う ま け 乃 面
夕 面 や 蓮花 の あ う を う 蓮 東
雲 蓮 し う 江 戸 形 う 蓮 見 夜

新 貢 う 家 河 越 く を

幕 を 渡 く 岩 と 角 蓮 し 経 庵 山

宰馬 う 一 関 云

蓮 を 北 中 も 七 日 を め う 蓮 の 郷

故常ゟ父ゟ万ゝゝ嫁
あれなら 法りのたすけとみるまくも
帷弱に別業に招く
去り来く 去ゝ来のたゝしの礼
再ひ家の出すと見く
若きを根り 事も 五尺の地をゆくら
入つの其風手当によれ
おもへたる人ありて それも京し
大坂衍大和より以て罪を復きれして併まおちなむす
罪を年出しい気すまる中にありて夜ゝ日に抱きたまけ

聞に従路の唱名をするむ為呼天寿とある八十九歳交結の思ひ
たまゝとゝめらの子孫を残し極のうたきたのし今日
住との言すも見らん出しむ家中を直盾をとめく行く
其孝ゝ嬰ゝ
于时天明壬寅二月廿日於東武亡命

哀傷擬十詠

聖迷りして帰りあひなり 身は去る
目りいさき けふりの末や ゆふ待る
君さくりすむりし 泣よ絶 とさり 詠
風の吹くらん 行も 聞り 見る声 え
為れさるく きの子を おもふ 現人

はのくと流れめり　紅さくら
高尾　さくら　松とも　なくて　紅の糸
かくら果し　杖よわ〳〵ちや　戸樫
きぢ〳〵きの有明さくら　見果ちり
もろハやれ　遅れ　疾れ　義さくら

双ら岩陸奥

鶯や　春と　わきと　樹ぬ　新ふくり

新庵山下て

深山法や　さくらも　ふて　あるハ新く

山中　辻堂ホ　碧く

千日の　樹ぬき　出典　仲　弧

新庵峠を伊賀と　出ふおさくふ

ふかう八下　海が　あきいせ　樹

きくれと　老弁の　ちくら　咲ヨ　多

ふ来れ　ちきのふ　北ふの　あくふ　山

花下　鶯ぬき　又ふを　呼きて　紀寺

忘〳〵と　ちれて　ちりめり　嵐山

日ふれて　始荷山下　あくふ

雲を　あて　鶯のさくふ　北　謙　ちき

やまひ　来乃下　まくく

匿すらひの子と詠並ぶあらはるゝ子
来も三日立ぬつと酔巣を結ひ侍りしを梁葦抄
なむ杜の色なる押尚勝藤されしなるに

西寺の花くらし若木ち老嵐

下京やさくら哉してくれの暈

半もや花くらりかく縁月花紫

丹宝ト醒く老婆り窓下

蕣りさけさくらふとしを浮り合

ちるとく花り皐比るのうゑ

挹台花

手へも花菜此世のさくら算なり

きくの川日の出の中より見さくらし

枇杷園中 花見

ほつとりや笑ふ川まりぬ花り桜

嵯山や花くらみけのみさこ鈍

新すむやうらひ分り出く蔽はらし

添り積くうろくまのや夕桜

園亜相公の清藩ニ有る日御会堂の桜の色まうらし
ひしきを紙におしうまうに色ひたまひな好

むらし今の孫ほひ似たく桜節

寛政庚戌二月みうしれ山ふとききやと思ひ立て

うゑこのあゆひ行張に張りもあへず先佐屋とまうで
仙女寺を過るに旅人宅迄
春さらば　月日の月　とみるに　立春
みよしの山路にてをうた
南帝の御廟を詣でるに彼大宰相の名をとゞめ侍る
なさき叢を埋めて往事関西にうもれたる恨を
かなしめるなり
多賀を　春さく　地下有馬の雲
いとへ　東の里を　海の波　を　春の山を　生きうつる
色に　秋なり　背くに　西へ　く

山名社　稲荷　このさや　の川
車紅子　赤り　をれる
君きそと　待う　阪の　花を　ちる
赤り　面別
夜の別　山　姫　純　ふち　頭
竹取の山
うつせ山　一日　妻と　別　る
り　妻や　住び　り　根　さゝの　松
ゆく　る　や　近　出　一　の　古　塊　ゆ
風　おかく　人　甘　なり　て　妻　れ　ぬ

ちへり　雲も尽きて　裏一日
春を見やれば　青る木の葉も
とりよれぬ　裏のり方や　雲下る
笠洲ま拾ひて
鶯や　裏山を　れ　乃裏
岳北名残　水ぬれて　裏ま　ま
ちるといへと　火ともしかたく　事ひ

倫五ニ一周忌

野菜　古菜　菜一　を　ちる日　雪
喜ちり　何やら　云ま　四方　法

夏之部

更衣　更む　ちり　雪り　庄氏の坊
更衣　いきたち　なり　渕田川
まりまりて

更衣　まり　宗也　嫁　下　清
拾　雪　京　を　ち　高　を
幸の　儒　傳　なり　ある　を　う
酒飲の　猿　屋　を　出　更む
むし　歯　面　の　ち　屋　ち　更
武蔵の玉川を渡る日

玉川の流れくるまうへ
すの山ゆすせ〳〵ゆ清冥ゐ紅を赤居の山桜
〳〵ゆ清ゆ
うゑ〳〵ゆ紅や苔の霧〳〵うゑ
郭ゑ ほと〳〵ゆ紅を風のさわらき
郭ゑ 聖山を紅ゑ戦き
時ゆ ゆ紅り 赤ゆの一すみ
長安万戸ゆ紅一鞭
ほと〳〵ゆ紅南さうて 鄙〳〵ゆ
東紅のゆ紅帰ゆ紅ゆ紅ゆ紅

うゑ〳〵ゆ紅ゆてきうゑや郭ゑ
かとうゑの春や清きく時ゆ
蜀魂ゆ巣を伯漸ゆ英ゆのゆ
かゆ〳〵ゆ来ゆ雲も忘ゆ桂ゆ

都貢ゆ挽歌

夏ゆ〳〵ゆ紅ゆ桂ゆ紅を畫やゆ心
ゆ紅 悄〳〵とおゆ紅ゆ〳〵夜ゆ
時ゆ 弱ゆ ゆ紅ゆ〳〵や みゆ紅や
日比 弱〳〵ゆ 悄〳〵ゆ 弱〳〵 郭ゑ
ほと〳〵ゆ紅ゆ軍 おゆ〳〵ゆ紅ゆ紅

かとく夢を あしかうる新秋の夢
声くらし 人まくハせ乃 夜ととも為
子規 啼や ぬきハの 扇 加減

故人台界子ハさきと號たる人もし洗川をかいとくし
故として志らも定の兄なりけるを家身上の変ニ
くわしく化の海にさすらひ廿とをまり亡人會て俳諧に
すきて一派に名あり 愈兼ひつて場台子没もされを一上
一夕雅情とかく人さる千葉の邊 松宅之甚男 俗青子
緒く風流にすくる事を手にはとく学ふ事の切 拙とまて
霊不満の白紙まさこともうなり手 おさらひ天下の今のため眼て
與今更にも名四方に有らとさて是より名聞にせよし
今月忌辰にあたりて孝子低吉旧知を催し 清遊の俳諧を
つとむと頗懐旧に不堪往事渺茫廿余年

一

本とく来れ 直をむしと 志のす山
子規 啼や 有様の 話うしら
郭公 嶋や 居守と 大ろ絲
蜀魂 夢は 豁かりも 薦ぬれし
暁 月 魂 入ぬ 夜やききれ
十日 ほと 法絲 と きられ 郭公

天明乙巳二月 菱恵一紙二句

御庭上の二樹 びわ 芙蓉 十五個

橘や まさきの実もなほ 実ながら 梅 さくら 時雨 先迄 花 紅

六月八日大ほうし 古実誠しなく 和歌を中

うしろ すのみ れ やほうぶ

鳥尾養泉

きも 出 うら 実 血を吐きて 部 五

ゆうしろ 事 一尺をわらひ 人 葉 の 上 五

うしけ 雪 きく れ ほく 実 色

閑古鳥 ほうしく と 麦の 穂 や ん こ 鳥

雲中 雨 おとう 多 方 なよ ん

ん こ 鳥 峰 や ふなき 雲 も あ ん

人 足 き は 汝 な く き 雨 出 鳥

笑 ほ こ や ゆ 現 ゆ け ん こ 鳥

物 鳥 の 糸 と ほ う ま 松 の 奥

糸 て 春 ま き う 物 鳥

牡丹 春 雲 く 月 を 抱 う 白 ほ ん

れ や ん し の る ん の を 牡丹 式

罌粟 か を ろ て ゆ う け し の 紅 れ

雲 た う き 麦 の 乙 う や 芥 る 乃 雨

白葉上

細殿敷中まで俳諧はふまつり今日老人白髪ぶ
志源うくをとうて居士ゑ事
台命ふまをく

居士へ送て 俳へむとく今

謡源てく

ちら芭蕉て焚生柳ゑや蕉翁の所
汐ゑ野や 祝ふきうるきし此ふ
やうくとや 火さを祝賀一重芭蕉
けし焼うく 遠能ちれを 歌和の

杜若 奥紙て を吟くゑや 杜若

筑紫ゑ多ふ
むう一安はうすめり 杜若
わ至ふさや きしく耳くの紙清水面
すりうと 切とのかしてかを つを
かをつく 植麦は 紙て ちうひ
昔茶や きるの 生る 水 澤
昔藥て 鷺 すを うち 旅 清 れ
蓑帽 蓑やれく 有うて 帽の四月ふ
宰馬ゑ月まうけを 時 壬寅三月廿六日 四月四日東武二告
死のうちや 象も百里を きうは

あの人形やあるかの蔵

卯の花　卯の花に家の人もうとうとと

家もあの中の月　蓑の一法師

山吹や

うの花や書き中の竹の門

夏　夏ふかく雨ぬるけしきかな

麦　青麦や流中に立ち出る妹

灌佛　花御堂　貴僧の二三人なる夏

一夏　夏山　山一夏　詩病僧あり

短夜　うゝ和や　人現なる乗物の作

月八月　雨も短夜と別れ多

短夜や　いの蓮のうゝ乗

冷酒一盃　鮮肉十片

松魚

松の葉に　葉盛人ちまつを

又焼し　ものの蘇完ちまま鰹

鰹ふる　浪ちあしを　夏ち毎

鰹祭

下ゝ代下のかさもあひ乗れ

若葉

花七分　若葉下　水ち葉ちた

人嫌ち　胡麻を　彩樹陰

わゝ方し　て涼ち下ちうち法ち

若葉 山伏ぶしみ〳〵と古程
雨雲のうき机しけり若葉哉
わら屋〳〵てあとうきもけいそきか
蔦北ろ若葉「吹切くれ」嵐の郷

反木立 雪を噛て一筆書ぬ反木立

夏雜 みとり若く夕面ぬるあつ〳〵山
栗若葉こく育うたゆき蜜蜂哉

伊勢世義寺にて
水札のふれ田は波る夕了雜

旬 牛糸やたけのふ時の住波伊

筆や忘れ夜了ふけく八重葉

若竹 わら屋月は若竹〳〵き哉
若竹や一字の灯 涼うち

百合 若竹や百合はなをし風末寺
宵〳〵下里遠く日を暮る哉

金魚玉 ふる人のみる夏下きよ金魚哉
升の宵ふるよ蓼のほう葉か

女也免 きのふ〳〵一味う姫根の花あや免
花あ屋めぬ古尺の霧をあふる哉
ふれあ屋免ふ尺墨うれ落自ひ

蟹丸歌

蟹とりく海蟹乃
海のふなぢらふのや免
あもいくく秋ぞし
八ツの足すゝあ衣をも
沈泉のそをあくされ乃蟹ゑ甲を立てしゝ今ゝ
蟹つの泥ゑ眠をぬゑひく蟹ゝ純ゝ舞ゝ春あゝ八海
あゝと青ゝも鳴ゝしゝ
池と沢ゝ仇ゝ猪の蟹ゝ
おもひ寄ゝ免ゝ

さわゝぐ浦ゝ
あや免ゝとゝふんゝ
をとゝれぬるおや蟹の

久面や　とゝ出掛小蟹乃穴

端午　沈泉ゝ

ゝつゝ衣や　ゝ乃ゝ　夏ゝ
巧や免ゝ　ゝ　枕ゝ
一町の　ゝ　ゝ
ゝの戸　ゝ　ゝ
菓玉　ゝ　ゝ
粽　ゝ　ゝ
禁馬　ゝ　ゝ

行雁日　年越く注連は寿ちや珍の糸
竹うゑく元政坊も おりふ命
女子をうしなふる沙汰を聞

過うなる月なくなり紀見ひあるふ
蛙の　つるもるて松葉を新宇鹿山
五月雨　境槍のあふ　たるうか月雨
り方なる　蛾のすまひやさ月雨
五月雨や　おうり　きあるうの法
文なや家くを　ほれさ川きあ足
さうれや　岩の山吹ふ川め

きれるの卯中ちう八月雨
蠶　ふも　ちふて　ふうさんきあめ
五月雨　ちふ紙ホ　むの地きうかすやき
蛙話　うたわをや　ちき新蛙の行一の
蛙咽や　夕の色を　立きふを
蛙　宴孔き　和学と足拵る蛙の郷
蚊　蚊ちらや　妻の雨地　義あふり
うれ　夢の夕　雲をかこ一ち
利ろ沼原　むさほふ　ふ世上の人
楽一ふう　おを地下の蚊の古ろ

蠅

庵まくもうけまりらむ蠅の足
ちへ五ちこ　あちこの先へたち也
丈芝竹うみちのくへ風をそる
二とせや　子ゑ涙ふ蠅も打て去レ
任隙の國松山の菜芝大和の玉虫ゝて五月雨ふる
の浮ゝ蚊も一角の一畫集め一日記やゝの物と尽るよ
男ひ寺塔ゝの独ゑ坊ゆ見八
祖ゑ見世見ゝの巻　こ物の蛾
巻を出ふ　ちちや庵れ　出ま
株木広や　蛾の巣　ゆる　五月山

蝶の塚　分の露の　林きにも　れぬこちゝれ
　　絵なる　分　れたのゝ　ゝ蜂　たこる
あきゝ原

蟬

馬塚や　宿蛾の人ゝけ　ゆ　ゆ
初蝉や　初涼の雲れ　たゝ五ゝ
蔦ゝの　山涼を　ますゝ世界の蔦
せゝゝ　ゝゝ　枝の蝉　おちよ　ゝ
蛍

蛍ゝ　ゝゝ　ゝすゝ　れ中　ゝ
蛍こゝ二ゝ　ゝ　ものゝ　ゝ蛍
舟中　盃のゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いふおとのきあくてやすく死ほうる
常夫や　風の遊み　ゆおろし
國美石のあらうの常と結くたるゝ人のつと沼者々る
日比竜みやしなる　恋あ舟のなるめて備並つまとひくと死うも
るゝと史しゝ史るゝあ和らくく乾とゆ死てそれちやうそ
鳥　ゆゝる　帰ら色　常ゆ月ほうる
水雞　多雞庫　君とてるゝ里　毒　多
永在とゆ　泊源　さ知ぬ　ゆ　なる　命
鳴牛　たのゝれき角とゝれ　ゝ　蛙牛
おかひ　ほうる　井　三年ふうるつむり

墓　海美れ　鬱よなて　毛きの　鳴
田植　田うゑ女のころひて　粕　ゆ　ま　ろり
あれらきれ　白　ま　ゆ　や　裏の田植くさ
殆　ほう　や　裏れ　田　ゑ　の　ふひ　ほう
つゑ　く　う　ゑ田の　緑れ　百　ゑん
糸　ゑの　り　梅田の　蛙　命　汐の　乾
汐　万　な　れ　ゆ　る　引　ま　や　百　番　あ

越の磯鶏つゑ　ま
さゝめ　ゑ　れ　海　ま　う　ゑ　の　出　ま　ゑ
海　土　う　葉　海　田　の　汐　ま　く　ゑ　う　ま　る

さゝとめの瀬
竹の巣て吹とゝろくな田をえつさ

紫陽花
あぢさゐやよれゝ蛾の咲きのうら
紫陽花も此日和なくし村さきつ
うちまねて装屋の灯うつ川なかう
紫陽花やわかれし時の色
あぢさゐや昼も蛙のなく夢
うつされぬあぢさゐ此ころやれ
花を菜にわく風の　菫一乃部
草あるふ儘の赤や昔しうつ

汲くされ気てかゝれ苔清水
此奥に聖おとし虫苔の花
桐の花れ寺は僧の里たれ川き
色に香て桐撓しておれて瀬

さゝしられ子をゑくらは　繁志之郎

麻子
山ふや麻の子迷れ移化ゑて
晴ゝきいやくなつうのうて　李

移川
なれき移れ岩をはきぬも泪　之郎
雨一時うのうなれむ水うす　水

霞盆子
山ふゝの陽まらけさり芳いちこ

李　李や　仕舞をうたふ　袁ノ八
柳の花　鞠つほうり　頭巾よつや　きれ子
赤笠の山をうして

澄ときれすすり衣　名のり　せと
鄙うりのかさしめとれや　花　樗
漁夫　ひれ雫かさりて　ふれ　ひほち
荻　鞠の　えを　ゐ　あ　を　樗

六月十四日　ふり　花も　ゆく　餅　梅　まうと　人　ふいひ
あつまりて　二日　三日　梅

梅　白まり　ゆ　餅　あうひ

梅　十ヲ　たうり　聖牛　れ　梅の　実　ふ　ク
海雲　深海雲　れ　ほうり　うきよ　ふ　郎
藻雲　藻の　れ　て　ゆ　り　雲　れ　て　を　ク
ことの　花や　引　ケ　ケ　ぬき　絶
萍　萍や　赤　ち　梅　書　の　ふ　を　ち　れ
麻　すハ　と　赤　ハ　ゆ　ま　し　麻扇
麻　うや　ふ　鞠　う　ら　れ　あ　ハ　ま
夕貝　ゆ　ふ　ほ　の　花　主　ま　れ　ら　梅　の　蝿
夕　岳　れ　ふ　踊　音　す　ち　郎
ゆ　ふ　ふ　れ　毒　咲　て　ち　ち　ち

夕[illegible]や　雲のかゝる高[illegible]
ゆふ[illegible]の[illegible]をちこちや本[illegible]
[illegible]のかや　あゝ[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]酒をのむ[illegible]
秋　秋[illegible]や　[illegible]畑ゆ[illegible]
[illegible]月夜の株[illegible]
[illegible]　瓜[illegible]
瓜の[illegible]や　[illegible]
むら[illegible]や　わ[illegible]て
[illegible]や　[illegible]

[illegible]
一度[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋雨　[illegible]
秋雨　[illegible]
[illegible]
蘭是仮[illegible]
[illegible]
雪華　[illegible]

白雨　夕立や　只一押の地へ　の気
見つゝゆけば　夕立　きゝぬ　清流
白雨や　巌　巣　ゆ　乾ぬ　巣　木原
夕立や　一　掛　岩　へ　たゞ　黒　糸

天明　乙巳　年　六月　二日ハ
平相国　伝　長　の　二百年　ゆ　あ　せ　つ
尾張の国　熱田　神宮　ぞ　の　社　に　れ　ば
新　を　ち　ち　と　雑　つ　ち　ま　り　つ　く
長山　の　御法　清　い　つ　ち　も　神　の　霊
春　水　ち　り　北　ち　ま　く　春　き　ま　ち　ま　ち

桜　り　日　の　器　ち　ま　く　感　慨　慨　慨

世　の　中　北　汗　を　石　よ　も　輸　丁　雑
ま　ち　ま　を　何　ま　た　く　ち　ま　ぬ　き　房
六　月　北　国　生　命　ち　川　輝　な　も

夏雲

ち　ち　の　く　北　完　ち　と　年　　蒲　義　百　四　の　法　延　ま　あ　む　と　都　ま
ま　ち　ち　の　ち　て　一　七　日　の　俳　諧　を　つ　む　嘆　と　基　伝　ま　ち　ち　と
都　鄙　農　業　の　風　を　の　滅　を　揮　く　色　を　感　き　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち
ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち　ま　ち
と　ま　る　日　北　ち　北　み　り　蛙　を　苦　く　去　年　ハ　ち　ま　ち　ま　ち　渠　魚　を

さとり赤とし小芳西巷之氣之見送る梁も老了系もれいぬ
ふの蹄ら一ふ百里ら要れ再今秋くらし
安れら法、傳く あて年 なりの雲
懐古 古坂や 雲幻 去 哀乃く 去
新の岡 ま
いひきの岡 系れらき橋とみる 之の郷
紙涼 夕すず 夏 紀の岸や 家ら 舞
中涼 人 迎る 去 あり
すーさや 秋 けく り 夕 音
丈芝ら雞 蛟ら一 対

製の 蔵 足 ハ涼 ー 孝 泊 氣
計きは すーお 鶴の 服 ず
五月 橘 南 涼 夏 み は ほ れ を
すーく 水 自 を 思 日 氣
さくら 子 に 氣の 毛 ふ を く 夕 涼
黄 北 戸 や 柳 すら て 夕 す み
みちのくまく
陸奥 辰 の 涼 豊 なり 千 松 高
丈 ら て 人 の ま ち や 門 涼 と 駆 つ ら 加 ま ま る 涼
夏 香 や 琴 を ト 掩 ら 夕 す 夏

後赤き　蟹泳ぎ出でゆく夏

簟　座ものの俤如何ー　や　簟

冷酒　塩辛の遠よおさつたりなしけ

ひさしけや　一味器ー　ゆりて

後園に朱百合對酌

山れろしめの風　みどりなる庵遊

月雫や　人寄る　山ゆつ

己酉南行但菴よりなく　庵ゆよ天を失ひ外央を悼

服よ　人く　茅　風も　吹つ人　坂やり

六日八六日　晴日七　ゆ　新　考稿八年二回と稿

十七年の今年南ゆ　ゆ　八月を用ゆ　俳句をいふと

句をとゆ　れしきと　育べゆ

ゆ　きゆ　や　何を　活甲変ゆ　家を　なる

ゆ　ひよ　ゆ　れ　ゆ　ひよ　ゆ　れ　ゆ　ゆ　ゆ

沖結　沖なる　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

浮筏　進ゆる　五　申よ　ゆ　ゆ　ゆ　風

ヨ 13
和 856
1